

大台ヶ原自然再生事業

1. 自然再生の取組の経緯

(1) 森林衰退と自然再生事業の実施に至るまでの経緯

大台ヶ原は、明治以前は一部地域で利用されてきたが、原生的な自然は継承されていた。大正5(1916)年から大正14(1925)年にかけて東大台では、製紙会社によりトウヒ、ウラジロモミ、ヒノキ、コメツガの大径木を中心に皆伐に近い形で伐採されたが、その後、天然更新によりトウヒが優占する森林が再生し、昭和30年代までは比較的まとまった形で森林が残っていた。しかし、昭和34(1959)年の伊勢湾台風や昭和36(1961)年の第二室戸台風等の大型台風によって、正木峠を中心とした地域において森林の林冠を構成していたトウヒ等の樹木が大量に倒れたため、一部の地域で林冠が開放した。加えて、風倒木の搬出を契機に林床を覆っていたコケ類が衰退し、代わってミヤコザサが分布を拡大した。また、周辺地域からの侵入等によりニホンジカの個体数が増加したため、後継樹や母樹の樹皮等がニホンジカによって採食される状況が広く目立つようになった。

(2) 自然再生事業の取組み

このような状況を踏まえ、環境庁(当時)は、東大台を中心に、昭和61(1986)年度から平成10(1998)年度までは「大台ヶ原地区トウヒ林保全対策事業」として、平成11(1999)年度からは対象を落葉広葉樹林にも広げて「大台ヶ原地区植生保全対策事業」と改称し、平成13(2001)年度まで植生保全対策を実施した。

平成13(2001)年に「大台ヶ原ニホンジカ保護管理計画」を策定し、森林衰退の著しい東大台の亜高山性針葉樹林を中心に植生保全対策に係る調査、ニホンジカによる森林植生への影響軽減対策(個体数調整の実施、防鹿柵・剥皮防止用ネットの設置)を行うとともに歩道の整備、保全の重要性の普及啓発を実施した。

東大台のみでなく、西大台についても、後継樹や下層植生が欠落する等、森林衰退が続いたため、従来、実施していた森林保全対策に加え、利用対策の充実を含めた総合的な視点に立って森林生態系の保全再生を図る必要性が生じた。このため、平成14(2002)年度から、「大台ヶ原自然再生検討会」を改めて設置し、森林生態系に関する調査、利用実態に関する調査を実施するとともに、それまで実施してきた対策等の評価分析を加え、学識経験者、関係機関とともに検討を進め、平成16(2005)年度に「大台ヶ原自然再生推進計画(第1期計画)」を策定した。

平成20(2008)年度に第2期計画を策定し、平成21(2009)年度からの5か年間、自然再生に係る取組を実施した。

平成25(2013)年度には、第2期計画の取組の評価を踏まえて、第3期計画となる「大台ヶ原自然再生推進計画2014」を策定した。同計画では、第1期計画からの大台ヶ原の自然再生の目指すべき姿(長期目標)を継承しつつ、平成26(2014)年度以降の20年程度の取組の方向性と、それを踏まえた今後の5年間の取組内容等について示した。

平成30(2018)年度に、過去5年間の取組結果の点検を行うとともに、「大台ヶ原自然再生推進計画2014(第2次:2019-2023)」を策定し、今後の5年間の取組内容等について示している(P. 72~74参照)。



ニホンジカにより剥皮を受けた
ウラジロモミ



正木峠の植生 平成18(2006)年

表 大台ヶ原における自然環境の変遷と自然再生の取組

年代	自然環境の状況等	自然環境保全・自然再生に係る取組等
1930～1940年代	【昭和22年】・正木峠周辺に樹幹の大きなトウヒ群落が存在※1	【昭和11年】・吉野熊野国立公園指定 【昭和15年】・吉野熊野国立公園計画決定、大台特別地域指定
1950年代	【昭和30年】・ミヤコザサ開花・枯死 【昭和32年】・正木峠周辺に樹幹の大きなトウヒ群落が存在※1 【昭和34年】・伊勢湾台風（瞬間最大風速32.6m/s（奈良市）による森林風倒被害発生	
1960年代	【昭和36年】・第2室戸台風（瞬間最大風速42.4m/s（奈良市）） 【昭和42年】・正木峠南東斜面のトウヒ群落が一部消失。パッチ状に風倒跡地（ミヤコザサ草地）が出現※1	【昭和36年】・大台ヶ原ドライブウェイ開通 【昭和40年】・旧大台ヶ原ビジターセンター開設
1970年代	【昭和51年】・正木峠南東斜面のミヤコザサ草地拡大※1	【昭和48年】・吉野熊野国立公園管理事務所設置 【昭和49、50年】・奈良県による土地の買い上げ
1980年代	【昭和57年】・正木峠南東斜面のミヤコザサ草地拡大※1	【昭和55年】・ユネスコM.A.B計画生物圏保存地域に指定 【昭和57年】・「大台ヶ原原生林における植生変化の実態と保護管理手法」に関する調査実施 【昭和59、60年】・奈良県が買い上げた土地を環境庁へ移管 【昭和59年】・特定自然環境地域保全計画（大台ヶ原保全基本計画）策定調査実施 【昭和61年～】・大台ヶ原地区トウヒ林保全対策検討会設置（平成12年、大台ヶ原地区植生保全検討会に改称） 【昭和63年】・大台ヶ原一帯が特別保護地区に指定
1990年代	【平成4年】・正木峠南東斜面のパッチ状のミヤコザサ草地がつながり、正木峠南東斜面に広大なミヤコザサ草地が出現 ・正木峠西側のトウヒ群落が疎林化※1 【平成10年】・正木峠南東斜面のトウヒ群落がほとんど消失 ・正木峠西側のトウヒ林が減少し、疎林状になり、ミヤコザサ草地が拡大	【平成4年】・現大台ヶ原ビジターセンター開設
2000年代	【平成13年】・正木峠西側のトウヒ林がほとんど無くなり、正木峠周辺が一面のミヤコザサ草地化 【平成15年】・緊急対策地区的ニホンジカ生息密度の平均が43.7頭/km ² となる。※2 【平成20年】・緊急対策地区的ニホンジカ生息密度平均17.8頭/km ² ※2	【平成13年】・大台ヶ原ニホンジカ保護管理検討会設置 ・大台ヶ原ニホンジカ保護管理計画（第1期）策定 【平成14年】・大台ヶ原自然再生検討会設置 ・麻醉銃、アルバインキャブチャーによるニホンジカ個体数調整を開始 【平成17年】・大台ヶ原自然再生推進計画（第1期）策定 【平成19年】・西大台地区利用適正化計画検討協議会設置 ・西大台利用調整地区運用開始 ・大台ヶ原ニホンジカ保護管理計画（第2期）策定 ・装薬銃によるニホンジカ個体数調整を開始 【平成20年】・くくりわなによるニホンジカ個体数調整を開始 【平成21年】・大台ヶ原自然再生推進計画（第2期）策定
2010年代	【平成24年】・緊急対策地区的ニホンジカ生息密度の平均が5.2頭/km ² となる。※2	【平成24年】・大台ヶ原ニホンジカ特定鳥獣保護管理計画（第3期）策定 【平成25年】・大台ヶ原の利用に関する協議会設置 【平成26年】・大台ヶ原・大峯山ユネスコエコパーク保全活用推進協議会設立 ・大台ヶ原自然再生推進計画（2014）策定 【平成29年】・大台ヶ原ニホンジカ特定鳥獣保護管理計画（第4期）策定 【平成30年】・大台ヶ原自然再生推進計画2014（第2次：2019～2023）策定

※1 航空写真による情報

※2 粪粒法による生息密度